第3回CTOサミット『研究開発からみたカーボンニュートラル実現への道のり ～カーボンニュートラルの本音を語ろう!～』開催報告

産学交流委員会

はじめに

日本化学会産学交流委員会が企画する「第3回CTOサミット」が7月25日に開催されました。本企画では,「研究開発からみたカーボンニュートラル実現への道のり」をテーマとして取り上げ，化学系企業のCTOクラスの方々と文部科学省のキーパーソンにご登壇いただき，各社ならびに文部科学省の取り組みのご紹介とパネル討論を実施しました。

今回ご協力いただいたのは須郷望氏（株式会社クラレ），中原雄司氏（帝人株式会社），森重地加男氏（東洋紡株式会社），井口雄一朗氏（東レ株式会社），（社名50音順）ならびに山口顕氏（文部科学省研究開発局・環境エネルギー課）です。開催形式は二部構成とし，丸岡啓二会長の開会挨拶・趣旨説明の後，第一部ではハイブリッド形式にて各社ならびに文部科学省の取り組みを15分程度で紹介いただきました。また第二部ではパネル討論を通じて議論を活発に行うため，昨年同様「チャタムハウスルール」*を適用し，現地参加者のみによるクローズド形式としました。

*当該会議で得られた情報を利用できるが，その情報の発言者やその他の参加者の身元および所属に関して秘匿する（明示的にも黙示的にも明らかにしない）義務を負うというルール。

開催趣旨

真の「カーボンニュートラル」は本当に実現できるのか？ 実現するためには研究開発の観点からどのような取り組みが必要なのか？ 本音を語ろう！ を主題として，企業の研究開発や経営企画のマネジメント層の方ばかりでなく，アカデミアにおいては各種プロジェクト応募時にパートナーとなりうる企業の方向性を知る絶好の機会になることを期待しました。一般的な事業活動では，競合となるCTOが社会課題について一堂に会し，率直に意見を交換する機会は多いとは言えません。一方，現在の社会課題は個社の事業活動・経営努力だけで解決できるものではなく，特に今回テーマとして取り上げた「カーボンニュートラル」に関しては官民挙げての有機的連携が不可欠なことから，本CTOサミットにおいて各社の取り組みならびに政府方針について相互理解を深め，かつ広く社会に活動を紹介し，さらにパネル討論では本音をぶつけ合い意見を交換することは企業経営の観点からも意義深いものになったと思われます。なお，ご登壇いただいたパネリストの皆様からも，各社が抱える課題を通じて貴重な意見交換の機会を得られたことは良かったとの感想をいただきました。

第一部

第一部は，現地会場とオンラインのハイブリッド形式にて開催され，総勢181名の皆様にご参加賜りました。これは前回開催時の参加者数を大きく上回るものであり，本サミットに対する関心の高まりを示す結果となりました。

本セッションでは，各登壇者の皆様より，各社におけるカーボンニュートラルへの取り組みについて，1人当たり約15分間にわたりご発表いただきました。各社の先進的な技術開発や戦略的な取り組みが紹介され，参加者にとって極めて有益な情報共有の場となりました。

セッションの終盤には，文部科学省の山口氏をお迎えし，政策的視点からのご講演を賜りました。国の施策と産業界の取り組みとの連携の重要性について，示唆に富んだご説明を頂戴し，参加者の理解を一層深める機会となりました。

なお，質疑応答につきましては，従来

の方針に則り第二部にて実施することとし，より深い議論を行う場として設定いたしました。

第二部

第二部は，「本音を語ろう！」という趣旨を最大限に活かすべく，従来同様にチャタムハウスルールを適用の上，開催いたしました。第一部にてご登壇いただいたプレゼンターの皆様をパネリストとしてお迎えし，丸岡会長をモデレーターに，CTO サミットの中核を成すパネルディスカッションが展開されました。

チャタムハウスルールの適用により，発言者を特定した議論内容の詳細については割愛いたしますが，以下のような重要課題に関して，率直かつ建設的な意見交換が行われました：

・カーボンニュートラルと事業性の両立可能性。
・実現に向けた研究開発上の障壁。
・企業間，企業とアカデミア間，さらには国プロとの連携の在り方。

会場には 33 名の参加者が集い，質疑応答の時間には多くの質問・意見が寄せられ，終了予定時刻に至るまで極めて活発な議論が交わされました。特に，カーボンニュートラルのような個社単独では対応困難な社会課題に対する産業界の取り組みについては，関心の高いテーマとして多くの質疑が集中しました。

本ディスカッション終了後，日本化学会常務理事である鈴木慎一氏より閉会のご挨拶を賜り，盛況のうちに第 3 回 CTO サミットは幕を閉じました。

おわりに

本サミット終了後に実施いたしましたアンケートにおいては，参加者の皆様より以下のようなご感想を頂戴いたしました：

・CTO の方々から各社の取り組みがわかり，有意義であった。
・過去 2 回と比較して，素材に関する技術的な話題が多く，非常に参考になった。
・企業として本音を語ることは容易ではないが，各社の取り組み概要を理解する良い機会となった。

これらのご意見から，本サミットが参加者にとって実践的かつ有益な情報共有の場となったことがうかがえます。また，今後の CTO サミットに対するご要望も多数寄せられており，これらの貴重なご意見を踏まえ，産学交流委員会にて次回以降の開催方針について検討を進めてまいります。

最後に，本サミットにご登壇いただいたパネリストの皆様ならびに現地およびオンラインにてご参加いただいた皆様に，心より御礼申し上げます。また，開催に向けた準備・運営に多大なるご尽力を賜りました日本化学会事務局の皆様に対し，深甚なる感謝の意を表します。

〔住田康隆（産学交流委員長）〕

© 2025 The Chemical Society of Japan